学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ

中京大学スポーツ

Beyond

Vol.31
2025 12月号

プロ野球ドラフト会議

硬式野球部から3選手が指名を受ける

FOCUS ON 中京アスリート

ラストスパート
陸上競技部4年生の引退試合に密着

Aim High Chukyo
フラッグフットボール 川口友香選手

表紙（左から）：大矢琉晟投手・秋山俊選手・高木快大投手
撮影：学生広報スタッフ「ライト」青木晟

学生広報スタッフ ライト 編集後記

ライトのHPはこちら

青山未夢
私はアスリート愛用品の取材を担当しました。競技ならではのスポーツ用品から、馴染みのある日用品まで選手それぞれの特別な背景があり、お話を伺う時間が楽しかったです!

宇都亜衣菜
陸上競技部の引退試合を取材しました。現地で感じた選手たちの熱気や臨場感、感動を皆さまに少しでもお伝えできていれば嬉しいです!

大場雄斗
アスリートの取材前は緊張しますが、会話を重ね仲が深まることで楽しく進行でき、より良い記事が書けると実感しました。

小山昌哉
取材を通して今まで知らなかったことを知ることができ、記事を書くことの難しさと楽しさを改めて実感できました。完成したページを見た時の達成感は何事にも変え難いものがありました。

桑原一貴
私が担当した「全力キャンパスライフ」では、1年生の学生アスリートが部活や私生活、授業をどのように両立しながら毎日を送っているのかを伝えたいという想いをページにこめました!

垣添琴葉
夏から制作に励んできた今号を、皆さまのもとへ無事に届けることができてホッとしています。取材を通じて感じた選手の方々の競技に懸ける強い思いや真摯な姿勢が、ページをめくる度に少しでも伝われば嬉しいです。

青木晟
ドラフト会議やイーグルテラスの取材など、ライトでしか体験できないことがたくさんありました。中京大学スポーツをさらに盛り上げていくために、より良い記事を書けるようにスキルを磨いていきたいです。

チューグルを探せ！

「エッヘンチューグル」がページの中に隠れています。

チューグルを見つけてアンケートにお答えいただいた方の中から、**正解した5名様**に抽選でチューグルグッズをプレゼントします!

こちらからご回答いただけます

回答期間:2025年11月28日（金）～2026年1月18日（日）

同じポーズの「エッヘンチューグル」を見つけてね!

CHUKYOイーグルマスコットキャラクター「チューグル」

中京大学スポーツ振興部のSNSもチェック!

Instagram | Facebook | X | Youtube

中京大学 CHUKYO UNIVERSITY

発行／中京大学
〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2
【広報課】TEL 052-835-7135
【スポーツ振興部】TEL 0565-46-6935

ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C019709

プロ野球ドラフト会議

2025年10月23日、プロ野球ドラフト会議が開催され、3人の選手が指名された。歓喜の瞬間の、選手のリアルな声を取材した。

ドラフト会議当日の様子はこちらから

profile
北海道登別市出身
180cm86kg
右投げ左打ち
遠投100m
50m6秒1
仙台育英高校

秋山俊（あきやま しゅん）
外野手　スポーツ科学部4年

成績

1年春から中堅手で出場。大学初アーチを満塁弾で飾り、2年春に打率300・4本塁打12打点で本塁打王を受賞し頭角を現す。3年秋には、キャリアハイの打率407を記録。4年春には打率388・4本塁打15打点で大学通算100安打を達成し、本塁打・打点王ともにベストナイン（B9）を受賞。4年夏、大学日本代表として出場した日米大学野球選手権では、打率429・出塁率500で首位打者に輝く。

埼玉西武ライオンズ・3位指名

稀代のスラッガーは、指名を受けた瞬間もその冷静な表情を崩さず、大きく息を吐いた。「指名されるまでずっとドキドキしていた。プロ野球選手としてのスタートラインに立つことができて、嬉しい気持ちとほっとした気持ちがある」と語る。高校時代には指名漏れも経験したが、今回のドラフトまでの心境を振り返ってもらうと、「何よりチームの勝利に貢献することをモチベーションにしてきた。その中で自分自身でも成長していった結果が、今回のドラフトに繋がったのかなと思う」と謙虚に答えた。

プロ入り後のレギュラー争いについては、「目標は首位打者をとること。走攻守すべてが自分の持ち味なので、いい意味で周りに影響されないように、自分の力を発揮していきたい」と語った。高い学力にも定評のある、秋山選手らしい自己分析をもとにしたコメントで、更なる飛躍を感じさせた。

半田卓也監督やスカウト陣が「走攻守すべてが揃った好選手」と評する秋山選手。その頼もしい存在感でチームにチャンスをもたらし、勝利を呼び込む風になるだろう。

胴上げされる秋山選手

ドラフト会議に臨む4選手

髙木快大（たかぎ はやと）
投手　スポーツ科学部4年

成績

1年春、6試合に登板し3勝1敗・防御率1・84、新人賞を受賞し鮮烈なデビューを飾る。3年春より主戦、春季リーグの開幕戦で94球完全試合（リーグ59年ぶり3人目）を達成すると、7試合で4勝1敗・防御率0・51を記録し、MVPやB9など5冠を果たす。大学日本代表に選出され、スカウトから注目が集まったが、秋はけがの影響で登板がなかった。4年春にはキャプテンに就任し、自己最多5勝、防御率1・71で自身2度目のB9に輝く。全国大会に2度、国際大会に2度出場。

profile
愛知県名古屋市出身 180cm 80kg
右投げ右打ち　MAX153km/h 栄徳高校

広島東洋カープ・7位指名

他の球団が5～6巡目で支配下選手の指名を終える中、7位という順位でついに指名を受けた右腕。指名の瞬間、その目には涙が浮かんでいるように見えた。指名された瞬間の心境を聞くと、「本当に、よかったな。という感じだった。嬉しい、安心という思いもあるが、色々な感情が混ざっている」と、笑顔を浮かべながら語った。

本人が印象に残っていると語った完全試合など、輝かしい成績を残した一方で、「人生で一番苦しかった1年」があったと語るほど、けがに悩まされた時期もあった。しかし、その経験を振り返り「これからの野球人生で必ず糧になる。指名された今だから、いい経験だったと思える」と前を向いている。また、憧れの選手は同じカープの森下暢仁投手。「野球に関することすべて、プライベートなどそれ以外のことも全部聞いてみたい」と語り、その顔には笑みがこぼれていた。

中京大学のエースであった髙木投手は、どんな経験からも活力を見出し、日本のエースにまで成長していくだろう。

大矢琉晟（おおや りゅうせい）
投手　スポーツ科学部4年

成績

2年秋までけがに苦しみ登板がなかったものの、3年春からベンチ入り。3年秋には規定未達・未勝利ながら先発の一角を担い、4試合で防御率1・25を記録。高校時代の最速142㎞から155㎞までアップし、急成長を遂げる。4年春の全国大会では2回戦に先発し、7回3安打無失点、8奪三振を奪い、勝利投手となったことでスカウトからの評価を一気に高めた。

福岡ソフトバンクホークス・育成3位指名

指名の瞬間の心境について、「本当にほっとした。ホークスは育成から支配下登録されて活躍している選手が多いので、自分も頑張りたいと思った」と語った右腕。中京大学での4年間は「技術面はもちろん、けがや手術を経験したうえで、目標に向かって努力する部分が大きく成長した」と振り返る。

プロ入り後については、「自分の思い描く投球スタイルは、強い直球で攻め、フォークで三振を取ること」と語った。

大矢投手はキレのある球を武器に、成長への道を着実に歩んでいくだろう。

profile
愛知県春日井市出身
178cm82kg 右投げ左打ち
MAX155km/h 中京大中京高校

沢田涼太（さわだ りょうた）
投手　スポーツ科学部4年

profile
愛知県半田市出身
190cm93kg 左投げ左打ち
MAX148km/h 享栄高校

成績

2年秋からベンチ入りをし、リリーフとして3試合を防御率0・00に抑える。3年秋には8試合に登板し、対愛工大戦で初勝利を挙げると、190㎝の長身から投げ下ろす直球を武器に、レギュラーとして定着した。3年春・4年春の全国大会では全6試合のうち5試合にすべてリリーフで登板。3安打5奪三振で無失点に抑えた。

3人の選手が指名を受ける中、左投げの長身リリーバーとしてその貴重な存在が目立っていたが、プロ野球チームからの指名はなかった。しかし仲間が指名を受けた瞬間、誰よりも輝く笑顔で仲間をたたえていた姿はとてもまぶしかった。沢田投手の今後の活躍にも期待したい。

文・構成:学生広報スタッフ「ライト」青木晟、大石和佳奈、桑原一貴、伊藤圭汰、佐々木百音　撮影:園田真那斗、森岡奈未

FOCUS ON 中京アスリート

SOFTBALL

男子ソフトボール

9月6から8日まで富山県で開かれた第60回全日本大学男子ソフトボール選手権大会に男子ソフトボール部が出場した。1回戦の高崎経済大学との試合では、7対1で快勝し、その後の2回戦の国士舘大学、3回戦の福岡大学との試合でも大きく点差をつけて勝利した。同志社大学と戦った準決勝では、両チームともに譲らない試合展開となったが、1対0で中京大学が決勝へ駒を進めた。準決勝について松浦稜太選手（現代社会学部3年）は、「西日本インカレの準決勝で敗れた同志社大学に延長タイブレークでリベンジした瞬間は、全員の勝ちへの執念を感じました」と熱く語った。

中京大学として32年ぶりの決勝戦では、日本体育大学と戦うも、0対8で悔しさの残る結果となった。男子ソフトボール部は準優勝で大会の幕を閉じた。

FOCUS

松浦稜太（まつうらりょうた） 選手
（現代社会学部3年）

今大会で松浦選手が、優秀選手賞を受賞した。松浦選手は今回の受賞について、「みんなに取らせてもらった感が強いです」と謙虚に答えた。今後の目標について尋ねると、「チームではもちろん日本一を、個人ではチームを勝利に導く一打を打てる選手、みんなに認めてもらえる存在になりたいです」と明るく語った。

SWIMMING

競泳

7月27日から8月3日まで、世界水泳選手権2025がシンガポールで開催された。競泳個人種目では50㍍平泳ぎ、100㍍平泳ぎに谷口卓選手（2023年度スポーツ科学部卒）が出場した。50㍍平泳ぎの予選では、谷口選手は26秒65という結果を残し、自身が持っていた日本記録を塗り替えた。また、西小野皓大選手（スポーツ科学部4年）が競泳個人種目200㍍背泳ぎに出場した。自己ベスト更新を目標のひとつに掲げていた西小野選手は、見事に準決勝で自身の記録を上回った。

また、9月4日から7日まで、第101回日本学生選手権水泳競技大会が東京で開かれた。結果は、男女ともに総合3位の好成績だった。男子主将の山口秀哉選手（スポーツ科学部4年）は、大会を振り返り「結果は悔しいものでしたが、毎日必死で競い合ってきた仲間と過ごした最高の四日間でした」と述べた。

FOCUS

山口秀哉（やまぐちしゅうや） 選手
（スポーツ科学部4年）

山口選手はインカレについて、「個人でメダルを取りたかった」と悔しさをにじませた。次戦に向けて「決勝に残るだけでなく表彰台に立つことを目標に、さらにタイムを縮めていきたいです。学生として残された時間の中で、自分自身が納得できる結果を残し、この悔しさを必ず次のレースで晴らします」と力強くコメントした。

GOLF

ゴルフ

6月4、5日に愛知県のセントクリークゴルフクラブで開かれた中部学生ゴルフ春季1部・2部大学対抗戦にゴルフ部が出場した。2日間の合計で569ストロークを記録し、優勝の栄冠に輝いた。今大会でゴルフ部創部61年目にして初めて春の団体戦で優勝した。また、石垣敢大選手（スポーツ科学部4年）は、個人で最優秀選手賞に選出された。

また、8月26日から4日間にわたって長野県の穂高カントリークラブで日本学生ゴルフ選手権が開かれた。ゴルフ部から石垣選手、大塚悠生選手（スポーツ科学部3年）、松岡龍希選手（スポーツ科学部4年）、古橋加寿翔選手（スポーツ科学部2年）の4選手が出場。石垣選手は、通算13アンダーパーという優れた結果を残し、3位タイで入賞した。

FOCUS

大塚悠生（おおつかゆうせい） 選手
（スポーツ科学部3年）

©CGA編集室

2025年の結果を振り返り、「中部学生ゴルフ春季団体戦では、全員で力を合わせて創部初の優勝を勝ち取ることができ、とても嬉しく、誇らしい気持ちです」と笑顔で語った。加えて、「現在、団体戦の全国大会での最高成績は8位なので、5位以内を目指して部全体で頑張りたいです」とこれからの目標について、前向きな姿勢で答えた。

TAEKWONDO

テコンドー

テコンドーとは、1200種類の足技と2000種類の手技で構成された韓国発祥のスポーツだ。足技を手技のように自由自在に操るという特徴があり、親しまれている。

9月7日、兵庫県立武道館で第19回全日本学生テコンドー選手権大会が開かれた。中京大学から、大島かれん選手（スポーツ科学部4年）が女子46㌔級に出場し優勝、濵口琴羽選手（スポーツ科学部2年）が女子57㌔級で3位入賞を果たした。今大会が大島選手にとって最後の学生選手権大会となった。過去の学生選手権大会で、2年生のときには2位と惜しくも優勝を逃し、3年生のときにはけがと体調不良で欠場したという。そのため、今大会は万全の準備で試合に臨むことを強く意識していたと語ってくれた。これまで悔しさを味わってきた大島選手が、その経験をバネに、今大会では優勝という素晴らしい成績を収めた。

（右）大島選手　©UNIVAS

（左）大島選手
©UNIVAS

FOCUS

大島かれん（おおしま） 選手
（スポーツ科学部4年）

大島選手に大会当時の心境を尋ねると、「優勝を果たした瞬間は本当に嬉しかったです。これまで何度もくじけそうになりながらも、この日のために練習を続けてきて良かったと心から思いました」と喜びを語った。今後の目標については、全日本選手権での優勝と日本代表としてのアジア競技大会出場を挙げた。大島選手の更なる活躍に期待したい。

文・構成：学生広報スタッフ「ライト」垣添琴葉、伊藤光汰、大石和佳奈、河澄祥歩、岩田理沙

陸上競技部 ラストスパート 次なる舞台へ

陸上競技部
川上凜太朗（かわかみりんたろう）**選手**
（スポーツ科学部４年）
神奈川県立菅高校出身。
専門は200㍍で、
自己ベスト（PB）は21秒29

仲間と走り切った２００㍍、集大成のラストレース

中学生の時に始めた陸上競技。これまで数々のレースに出場してきた川上凜太朗選手（スポーツ科学部４年）が９月に行われた西日本インカレをもって競技生活を締めくくった。

神奈川県出身の川上選手。高校時代のコーチの勧めで中京大学の陸上競技部の見学に来た際にトラックで走る選手たちから熱気を感じたことが決め手となり、進学を決めた。

大学３年時から２００㍍を専門種目として取り組み始めた。それまでは１００㍍や４００㍍に取り組んでいたが、どこかつかみきれない感覚があり、試しに２００㍍に取り組んだ際に今までにない難しさを感じた。しかし、だからこそチャレンジしたくなったという。

６月に行われた全日本インカレでは同じ２００㍍を専門種目としている周囲の選手との差を感じ、大きな壁に直面した。しかし、「勝ちたい」という気持ちを競技にぶつけ、壁を乗り越えていきたいと引退試合である西日本インカレに対する意気込みを語ってくれた。

その西日本インカレでは予選、準決勝を通過し、決勝まで駒を進めた。決勝は７着で惜しくも表彰台とはならなかったものの、集大成と言える走りを見せてくれた。

今後は陸上からは距離を置くという川上選手だが、「もし速く走れるようになりたい子どもたちが身近にいれば走り方を教えてあげようかな」とにこやかに語ってくれた。陸上競技で培った持ち前のチャレンジ精神は新たな舞台での活躍の力となるだろう。

大会結果

- 予選(9月13日)10組2着　21秒36
- 準決勝(9月14日)2組4着　21秒38
- 決勝(9月14日)7着　21秒33

大学4年間のエピソード

川上選手が仲の良い選手として挙げたのは、同じく短距離ブロックの尾澤侑真選手（スポーツ科学部４年）だ。

中でも印象的だったと話すのは、今年の全日本インカレでの出来事。１００㍍に出場した尾澤選手を応援した際、レース直後の尾澤選手から「俺の記録を見ろ！」と電光掲示板を指さすようなリアクションをされたが、結果は３着。尾澤選手のお茶目さが分かる話を披露してくれた。

一方、尾澤選手は川上選手を「超ポジティブ人間」と称している。けがをしていた時期を明るく乗り越える姿を見て、ネガティブ思考だった尾澤選手も、触発されて前向きになっていったそうだ。

西日本インカレでともに決勝進出を決めた時は、ハイタッチで喜びを分かち合う様子も見られた。

（左から）尾澤選手、川上選手

関連記事はこちら

文・構成:学生広報スタッフ「ライト」小山昌哉、宇都亜衣菜、岡田美虹

CHUKYO 6 SPORTS
～Challenge & Connect～

アスリートの愛用品

プレースタイルに個性があるように、アスリートの愛用品にもその人らしさが出ます。
日用品からスポーツ用品まで、選手たちのこだわりアイテムとエピソードをご紹介します。

recovery

カッピング

マヨネーズ

心と体を癒す必需品

愛用品として一番に思い浮かんだのが、疲労回復に欠かせないカッピングだという山口選手。朝の練習では吸引力の強いものを付けたまま泳ぐのが日課だそうです。そんなストイックな日常を送る一方で、実は自他共に認める“マヨラー”でもあります。中でもお気に入りの食べ方は「そぼろ丼×マヨネーズ」。思わず試してみたくなる組み合わせです。

水泳部
山口秀哉（やまぐちしゅうや）**選手**
（スポーツ科学部4年）

スケート部
松生理乃（まついけりの）**選手**
（スポーツ科学部3年）

心身を整えるお守り

日々練習に励む中でリラックスを大切にする松生選手。中でも石鹸の香りで心を落ち着けるハンドクリームを大切にしているそうです。一方、淡い白色と、取っ手のリボンが映えるこのハンドバッグ。6年前に松生選手のスケートを見て涙を流してくれたファン第一号の方から特注で頂いたそうです。ファンの想いをスケートに乗せ、滑り続けます。

ハンドクリーム

ハンドバッグ

cute

muscle

筋トレグッズ

より強くなるために必要不可欠

オフェンスラインでチームを支える板橋選手。強固なフィジカルが求められるポジションのため、毎日欠かさず筋トレに励んでいます。筋トレグッズは身体づくりを支え、マッサージガンは練習や試合後の疲れを癒してくれる相棒のような存在です。チーム目標である甲子園ボウル出場に向け、日々着実な努力を積み重ねています。

マッサージガン

アメリカンフットボール部
板橋琳太郎（いたばしりんたろう）**選手**
（スポーツ科学部2年）

文・構成・撮影:学生広報スタッフ「ライト」青山未夢、大場雄斗

全力キャンパスライフ

今回は体育会に所属する1年生に密着しました。大学生活にも慣れ、授業と部活を両立するリアルな日常に注目です。

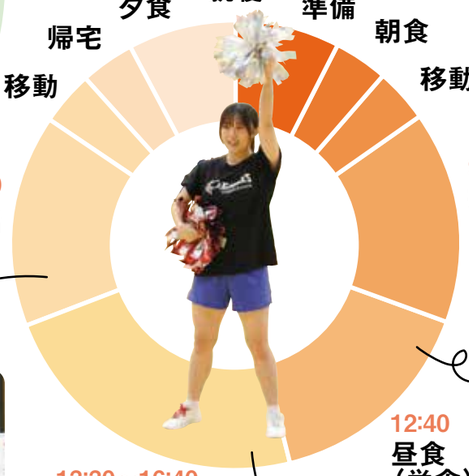
チアリーディング部
下浦栞桜（しもうらしおん）さん
（スポーツ科学部 1年）

一人暮らしで
大変な部分もあるけど、
友人と協力しながら授業や部活
を両立することは楽しいです!

睡眠時間を意識して、
授業と部活を両立!

アルバイトは授業がない日に入れる!

1日で授業も部活もアルバイトも行うのは体力的に大変なので学校がお休みの日に集中してアルバイトをします!



午後に備えてしっかり栄養補給!!

おすすめメニューはネギトロ丼!
リーズナブルで食べやすいです!

支え合うことを大切に!

チアリーディングはチームスポーツなので部員同士の支え合いを大事にしています!

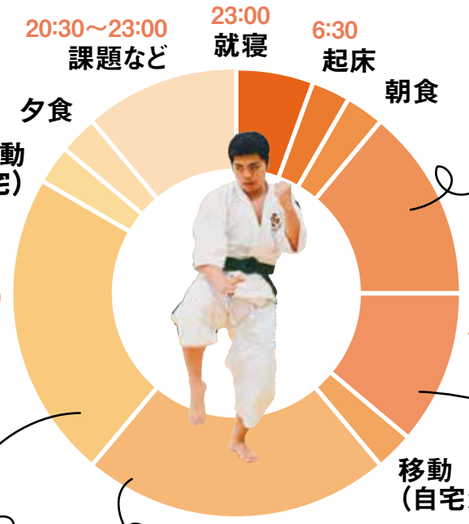
授業や課題は友達と協力!

1年生で授業が多いため、授業で分からないところを友達に相談し、課題はお互いを応援しあって取り組んでいます!

少林寺拳法部
宮﨑陽士（みやざきはると）さん
（法学部 1年）

大学で部活を
やっていることで、
友人や先輩など多くの人との
つながりを持つことが
出来ています。

今の目標は
全日本学生大会で
優勝すること!



夜に部活があるから朝にアルバイト!!

1年生で授業も多く、夜は大学の課題などを終わらせたいため、アルバイトは朝に行います!

部員との繋がりを大切に!

普段から先輩や同級生と会話することを意識し、部員のみんなと切磋琢磨して部活に取り組むことを大切にしています!

授業は常に集中して受ける!

普段から睡眠を大切にしているからこそアルバイトの後でも授業を集中して受けることができます!

何もしない時間を作らない!

充実した毎日にするため、常にやることを考え行動することを心がけています!

文・構成:学生広報スタッフ「ライト」桑原一貴、日比野彩香

学生広報スタッフ ライト がアルティメットに挑戦!

Q アルティメットとは?

「究極の競技」との呼び名もあるアルティメット。アルティメットとは、7人制のスポーツです。100メートル×37メートルのフィールドでフライングディスクを落とさずパスして運び、コートの両端にある各々の味方のエンドゾーンでディスクをキャッチすれば得点になります。直径27センチのディスクは硬く、175グラムと重みもあります。セルフジャッジ制の競技であるアルティメットは、出場者が競技者であり審判でもあります。

Q アルティメットの魅力を教えて!

アルティメットの魅力はいろんな競技の融合であるところです。今までの競技歴がバラバラでも、誰もが始めやすくみんなで楽しめます。また、チームスポーツで仲間との連携が必須だからこそ声を掛け合いみんなで喜べるところも魅力です。シュートや長いプレーが成功した時、そして勝った時が一番嬉しいです。1人ひとりのプレーが繋がって一体感が出る感覚が魅力です。

アルティメット部体験動画はこちらから

Q 部員のこれまでの運動歴は?

島田陽帆(しまだみなほ)さん(スポーツ科学部3年)
私は小・中学生の頃にバスケ部、高校ではバレー部を経験してきました!

五十嵐史織(いがらししおり)さん(スポーツ科学部4年)
私は中学・高校でハンドボール部に所属していました!

土橋美咲(どばしみさき)さん(スポーツ科学部3年)
私は中学でソフトテニスを、高校で硬式テニスをしていました!

他にも、野球経験者、ソフトボール経験者、ダンス経験者など、いろいろな部活の経験者が集うアルティメット部。みんな大学から始め、スタートラインが同じだからこそ切磋琢磨して成長できる環境があるのも魅力です。

Q 今後の目標は?

学生インカレで日本一を取ることです!

私たちが挑戦します!

Charge!

青木晟(あおきじょう)
(総合政策学部3年)

近藤愛華(こんどうあいか)
(現代社会学部2年)

青木さん

Q 体験を通しての感想は?

A 楽しかったです!こんなに走るとは思っていませんでしたが、基礎練習もゲーム形式も声を掛け合いながらできました。

Q 難しかったことは?

A 直線に投げることです。風の影響を受け、風上と風下で投げ方が違うのも難しいポイントだと思いました。全然思っていたところに行かなくて…部員のみなさんは真っ直ぐに投げられて、コントロール力もあって、本当にすごいなと思いました。

近藤さん

Q 体験を通しての感想は?

A すごく楽しかったです!部員のみなさんが分かりやすく教えてくださいました。大まかなルールが分かりやすく、ディスクがあれば簡単に始められる手軽さも魅力に感じました。

Q 嬉しかったことは?

A 部員のみなさんの一体感を体験できたことです。上手にディスクを投げられた時、みんなでハイタッチをするのがすごく嬉しかったです。これぞチームスポーツだと感じた瞬間でした。

文・構成:学生広報スタッフ「ライト」石井莉子、宇都亜衣菜、三上祐輝　撮影:園田真那斗、岡田美虹

大学スポーツの力で地域の人々を元気にする
「マルチスポーツ体験イベント」公募支援プログラム

中京大学 子どもスポーツフェスタ

2025年11月9日(日)

子どもスポーツフェスタの様子はこちらから

中京大学子どもスポーツフェスタが11月9日に豊田キャンパスで行われ、
子ども連れの家族など800組、延べ2,800人がさまざまなスポーツとふれあいました。

体操を通して、新しいことに挑戦する楽しさを伝えたいです!

体操競技部　**髙橋大地(たかはしだいち)さん**
体操体験

子どもたちが楽しそうに滑っている姿を見れて嬉しかったです!

スケート部　**横井きな結(よこいゆな)さん**
スケート教室

競技としてのチアリーディングの魅力を知ってほしいです!

チアリーディング部　**鈴木遥菜(すずきはるな)さん**
キッズチア教室

ハンドボールの魅力が伝わるように教えることができました!

ハンドボール部　**水島優羽(みずしまゆう)さん**
ハンドボール体験

子どもたちに走る・跳ぶを両立することの楽しさを伝えたいです!

陸上競技部　**八木健輔(やぎけんすけ)さん**
走り幅跳び教室

親子でフェンシングを楽しむ姿を見ることができました!

フェンシング部　**小林侑愛(こばやしゆうあ)さん**
フェンシング体験

まずはゴルフに親しみを持ってもらうことが一番の目標です!

ゴルフ部　**田中浩大(たなかこうた)さん**
ゴルフ体験

卓球をしたことがない子も楽しめるように頑張りました!

卓球部　**小木曽彩加(こぎそあやか)さん**
卓球教室

当日はあいにくの雨となり、屋内のみでのイベント実施となりましたが、かけっこや水泳、スケートなど多彩な競技が体験でき、豊田キャンパスには子どもたちの元気いっぱいな声と笑顔があふれました。今回多くのイベントを支えたのは体育会の学生たちです。各部活動のメンバーが講師役となり、ルールの説明や実技指導を行いました。学生にとっても、自分たちの競技をわかりやすく伝える難しさや相手に合わせた声かけの大切さを学ぶ貴重な体験となりました。参加者からは「学生のお兄さん、お姉さんたちが優しく教えてくれて嬉しかった」という声が多く寄せられ、スポーツを通じて子どもと学生が一緒に成長できる充実した一日となりました。

文・構成・撮影:学生広報スタッフ「ライト」青木晟、青山未夢、桑原一貴、糟谷美羽、小山昌哉、三上祐輝

豊田キャンパス2号館

学生食堂に密着

豊田キャンパス2号館の学生食堂「イーグルテラス」と「チューグルカフェ」は2024年春にリニューアルオープンした。今回はイーグルテラスがどのように運営されているのか学生広報スタッフがインタビューした。

Yummy

すべての学生に必要な栄養を

エームサービス株式会社
太田桃子さん

太田さんは管理栄養士として、イーグルテラスのメニューをすべて考案している。

朝と晩に1食ずつ、昼に2食を提供しており、8週間の中で同じメニューが出ないようにと工夫している。単純計算で300種類を超えるメニューがあり、太田さん自身も「そんなにあるんですね!」と驚くほど。

「最も重要なのは、設定した栄養価を守ること。多少上下しても5%未満」という設定を課し、さらに「たんぱく質は設定を上回るように、脂質は下回るようにしています」と話した。また、メニューの考え方は「まず文字に起こし、そこからレシピに起こします。この段階で栄養価を見ながら、例えば肉の部位や種類を変えるなどして調整しています」とのことで、その苦労と努力は計り知れない。

ランチタイムのイーグルテラスは、学生アスリートのみでなく、一般の学生も多く利用する。そのため、「AランチとBランチで、アスリート向けと一般向けにメニューのイメージが異なるようにしています。もちろん、どちらを選んでも摂取できる栄養価に大きな差はありません」と、ここでも工夫が施されていることがわかる。

そんな太田さんの思う最大のアピールポイントを伺うと、「アスリートに必要な栄養と、普通の生活でも必要な栄養はほぼ同じ。食事をするだけでそれらを補えることが学食の利点なので、みなさんにどんどん利用してもらいたいです」と語ってくれた。

wow!!

学食スタッフさんのタイムスケジュール

06:00	出勤・朝食の仕込み
07:00	体育会クラブへの朝食提供
10:00	昼食の仕込み
11:00	昼食
14:00	夕食の仕込み
19:00	体育会クラブへの夕食提供
23:00	片付け・退勤

※シフト制

豊田キャンパス2号館
EAGLE TERRACE(1階)／CHUGLE CAFE(2階)

営業時間はこちらから

学生の"居場所"を目指した食堂リニューアル

中京大学スポーツ振興課

学食リニューアルに携わったスポーツ振興課の職員に話を伺った。イーグルテラスは高強度な運動をしている体育会学生にとって栄養のバランスが良い食事を安価に楽しめるアスリート食を提供するためにリニューアルされた。スポーツを頑張るアスリートにとって、食事の面からサポートする態勢が整っている。さらに、豊田キャンパスに通う学生にとって"居場所"になるような雰囲気をめざし、1階・2階の内装にもこだわったという。学生が集う空間を提供し、くつろぎながら仲間とのコミュニケーションを楽しむことができる。リニューアルされた学食は、スポーツをする学生にとっても、そうでない学生にとっても居心地の良い空間となっている。

＼附属高校の最新ニュースをお届け!／

中京大中京高校 News

News

世界へ挑む 女子軟式野球部 森本愛華(もりもとあいか)選手

今回紹介するのは、女子軟式野球部に所属しながらBaseball5(ベースボール5)日本代表として世界で戦う森本愛華選手(3年)。ベースボール5とは、1チーム5人制、5イニングからなる野球・ソフトボールの新しいストリート競技であり、森本選手は過去に3度日本代表に選ばれている。今年3月に開催されたユース・アジアカップでは、大会MVPに輝き、日本の優勝に大きく貢献した。

MVPを受賞したときについて「まさか自分がと驚いたが、チームに貢献できた証なので嬉しかった」と振り返る。個人の栄誉でありながら、森本選手はそれを仲間と勝ち取った成果として受けとめていた。彼女にとってMVPは、チームワークの結晶を象徴するものだったに違いない。

日本代表は男女混合のチームであり、当初は「コミュニケーションに難しい部分もあった」と振り返る。しかし、練習や試合後の食事を通して距離が縮まり、少しずつ信頼関係が築かれていったという。「緊張しているときはみんなで声を掛け合ったり、背中をたたいたりして鼓舞しあった」と話す。

9月にメキシコで開かれたワールドカップに日本代表として出場し、優勝を目指して臨んだものの結果は7位にとどまり、悔しさが残ったと語る。一方で、世界各国の選手たちと交流する機会にも恵まれ、多くの刺激を得たことが今後への大きな糧になったという。

世界を相手に戦う舞台でも、仲間を信じ、自分らしくプレーすることを大切にする森本選手。アジアの頂点を経験した彼女が、次はどんな活躍を見せてくれるのか。森本選手の挑戦から目が離せない。

女子高校生初の甲子園始球式

朝日新聞社提供

森本選手は、8月に開かれた全国高等学校野球選手権大会(夏の甲子園)において、女子高校生として初めて始球式を務めた。全国の高校球児が憧れる夏の甲子園のマウンドに彼女が立ったことは大きな注目を集めた出来事である。ベースボール5のユース・アジアカップでMVPに選ばれた功績が認められ、今回の選出に至った。

始球式当日を振り返り、「練習から緊張がすごかったが、普段とは違う景色の中で楽しく投げることができた」と語った。満員の観客席やテレビカメラ、甲子園特有の熱気は、普段のマウンドとは大きく異なるものであったが、その状況を楽しみながら堂々と投げる姿は観客に強い印象を残した。

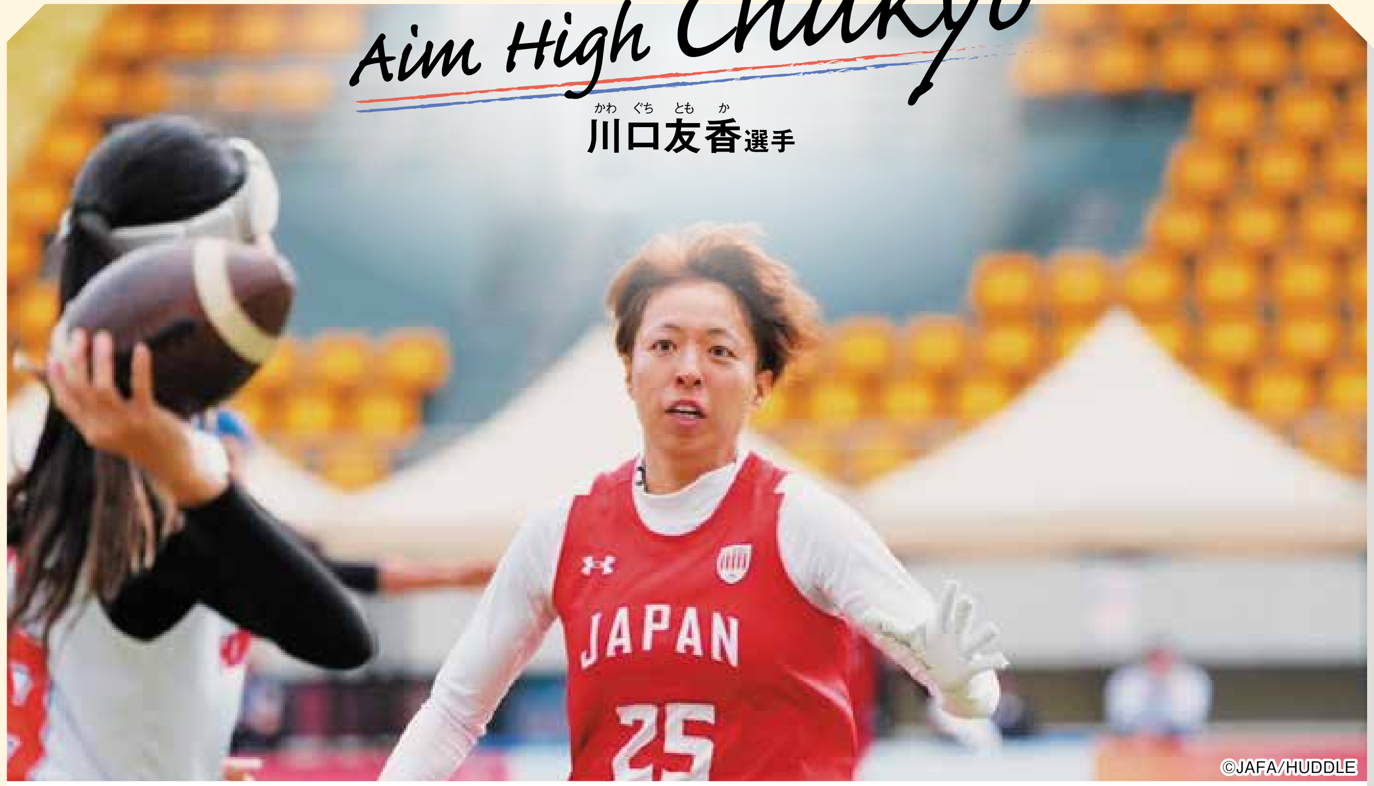
また、始球式に臨んだ心境について「野球の魅力や女子プレーヤーの存在を多くの人に知ってもらいたいという気持ちで投げた」と述べている。単なるセレモニーではなく、自らが女子野球を背負う存在であるとの自覚を持ち、使命感を込めて投じた一球であった。

女子高校生として初の始球式という快挙は、森本選手にとって忘れられない経験であると同時に、後に続く女子野球選手たちにとっても大きな意味を持つ出来事となった。

監督が語る森本選手の歩み

中京大中京高校女子軟式野球部の土井和也監督に森本選手について話をきいた。森本選手がベースボール5を始めたのは、クラブの練習で土井監督がこの競技を取り入れたことがきっかけである。土井監督は「グラウンドで多くのクラブが活動しており、スペースと時間が限られる中で、全天候型であり、野球に活かせる技術が多くあることを知り、取り入れた」と語る。限られた環境を逆手に取った工夫が、新しい挑戦へとつながったのである。日本代表に選出された際は、「初めは(世界各国を相手にするのは)厳しいかなと思ったが、試合をみると堂々とプレーしていて成長を見られた」と話し、その姿に確かな成長を感じ取っていた。

(左から)土井監督、森本選手



©JAFA/HUDDLE

Aim High Chukyo

川口友香選手

競技歴わずか2年で日の丸を背負う期待のアスリート！

フラッグフットボール日本代表 川口友香選手

フラッグフットボール（以下、フラッグ）という競技をご存じだろうか。アメフトから派生した競技で、その最大の違いは、タックルの代わりに腰に付けた2つのフラッグを取るというブロック方法にある。フラッグフットボール女子日本代表チームは10月24日から26日に中国・寧波で開催されたアジア・オセアニア大陸選手権で見事3位に輝き、世界選手権への出場権を獲得した。試合で、一際輝きを見せたのが川口友香選手（スポーツ科学部2019年度卒・スポーツ振興部職員）である。

フラッグとの出会いは、2年前に遡る。当時、17年間プレーヤーとして、また指導者として全国大会まで歩んだバスケットボールの道から身を引き、何にも追われない生活をしていた。当時のことを「最初は何時に寝ても起きても良い生活に幸せを感じていたが、数か月もしたら退屈に変わっていた」と振り返った。そんな時にフラッグの道を示したのは、バスケットボール部時代の先輩だった。地域のミドルエイジに絶賛されてプレーしたその心境は、バスケを始めた頃と同じ「純粋な楽しさ」だった。これは川口選手が考えるフラッグの一番の魅力にも通じる。併せて、競技の魅力について伺うと「アメフトと違い、タックルがなく、コートも狭いため、年齢・性別を問わず一緒にプレーできることや、ボールを投げる・取る専門のポジションがあるため、全てできなくとも輝けること」と答えた。その言葉通り川口選手は、バスケ時代に培った「球際の強さ」、中京大学入職後に陸上競技部の練習に混ざって鍛えた「スピード」を活かしたラッシャーというポジションを主として日本代表チームの中で活躍している。そして、トレーニングで重視することについては「環境」と力強いひとこと。「世界」を目指すからには同じ目標を持つチームに入らなければいけない」と続け、「その点、中京大学には多くのオリンピアンが在籍しており、日々刺激を受けている」と言葉を綴ってくれた。そんなストイックな川口選手は、幼いころから憧れていたオリンピックという舞台について「出場のチャンスがあるなら全力でチャレンジしたい」と意気込む。そのための指針として「自分がやるべきことを最後までやり続ける」と自身を鼓舞した後、「負けてもいいなんて考えは持っていない」と変わらない心持ちを言葉にした。

川口選手は2026年8月にドイツ・デュッセルドルフで開催される世界選手権に向け、また2028年に開催されるロサンゼルスオリンピックの代表入りに向け、日々着実に努力を重ねている。

©JAFA/HUDDLE

文・構成：学生広報スタッフ「ライト」大場雄斗

氷上の瞬足勝負！

ROAD TO MILANO

ショートトラックスピードスケート注目選手

中京大学を練習拠点とする有望選手たちが五輪代表争いに挑む

関連記事はこちら

林康生（はやし こうせい） スポーツ科学部4年

五輪へ照準

ワールドツアー第1～4戦の代表に名を連ねた。次なる目標は五輪代表入り。

金メダルを目標に

昨季2月のワールドツアーミラノ大会では、1500メートルで2位に入る快挙。五輪での金メダルを目標に掲げている。

吉永一貴（よしなが かずき） スポーツ科学部2021年度卒 トヨタ自動車

3大会連続五輪出場へ

平昌、北京大会に連続出場。1000、1500メートルともに決勝進出を逃した。「今回は攻めの姿勢で臨む」

五輪での活躍を目標にこの1年

これまでの悔しさを胸に「気持ちは金メダルを」。ワールドツアーで日本チームの枠取りにも全力を尽くす。

林大剛（はやし だいご） スポーツ科学部2年

兄弟で挑む五輪代表

林康生選手の弟。ワールドツアーは補欠選手入り。

最後まであきらめない

持ち味のスタミナを生かした粘り強いレースで代表入りを狙う。

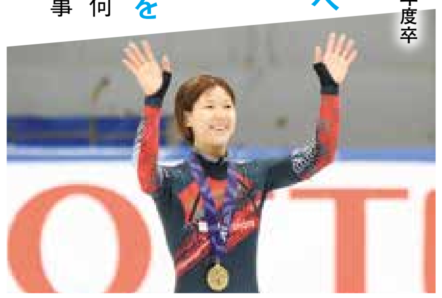
平井亜実（ひらい あみ） スポーツ科学部2019年度卒 トヨタ自動車

競技生活の集大成として五輪へ

前回の五輪出場をわずかの差で逃し、今回は五輪への再挑戦だ。「一握りの人しか行けない所で活躍したい」

メンタル面を大切にして勝利を

1000メートルを得意とし、国内大会で何度も勝利している。「一瞬の判断が大事な種目」そこを大切にしている。



中島未莉（なかしま みれい） スポーツ科学部出身 トヨタ自動車

この種目初の五輪メダリストに

日本女子選手として五輪初めての表彰台を目指す。10月にカナダでのワールドツアー1000メートルで8位入賞した。

昨夏のアメリカ合宿で急成長

粘り強さを持ち味とし「1500メートルの長距離が得意です」。確かに日本選手トップの力を発揮している。

髙橋花菜（たかはし はな） スポーツ科学部2024年度卒 トヨタ自動車

調子は決して悪くない

ワールドツアー第1～4戦の出場はなかったが、目標は五輪だ。

得意のスタートにかける

スタートからトップスピードへの移行の素早さが持ち味だ。